

『敵との コラボレーション』②



先号に「敵とのコラボレーション」について掲載したあと、様々な反響が大きく、わたしを含め皆さんが日々の生活の中で、いかに対人関係で悩んでいるのかをつきつけられたと思います。

今回は、従来型のコラボレーションではなく、コントロールされていない状況で協働できるようにするためのストレッチコラボレーションの仕方を本の中から紹介しようと思います。

◆対立とつながりの受容(第一のストレッチ)

力(パワー)と愛(ラブ)という補完し合う衝動を、どちらか一方だけ選ぶのではなく、両方とも使わなければならない、ということなのです。

力は自己実現の衝動であり、断固として主張することによって表現されます。

愛は、再統合の衝動であり、相手と関わることで表現されます。

この二つの衝動を同時にではなく交互に使う必要があるのです。



力



愛

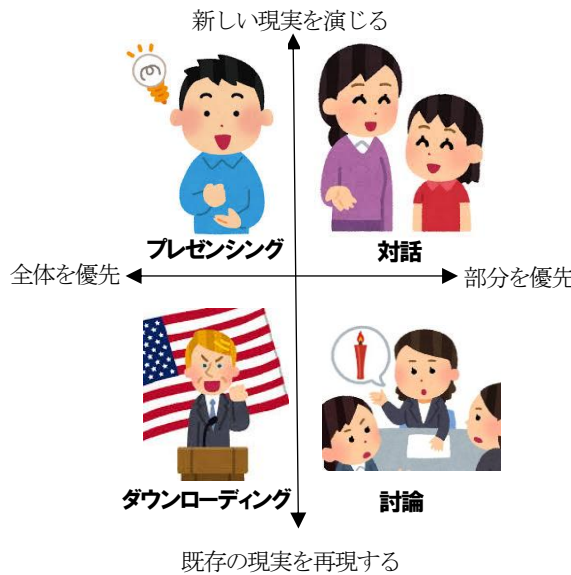
生成的側面	関わる	主張する
限度の合図	屈服する	抵抗する
退行的側面	操作する	強要する

◆話し方と聞き方を変える(第二のストレッチ)

従来型コラボレーションは問題や解決策、計画に合意しその計画を実行することによって前へ進みます。しかし、複雑でコントロールされていない状況では、実行可能な様々な意見や行動を実験する必要があります。一歩進んでは起きていることを観察し、また一歩進むということになるのです。

そうした状況では、今まで経験したことだけで「討論」したり、「ダウンローディング(今までの経験で反応的に行動)」するだけではコラボレーションが難しくなります。

四つの話し方と聞き方



話し合う前から結論つけるのではなく、話し合い「対話」の中で気づくことを「プレゼンシング」する、つまり聞く事で新たな協働が生まれます。これら四つはどれも妥当で有益なものです。一つのモードだけ採用する必要があるというのではなく、これらをなめらかに流動的に切りかえる必要があるのです。

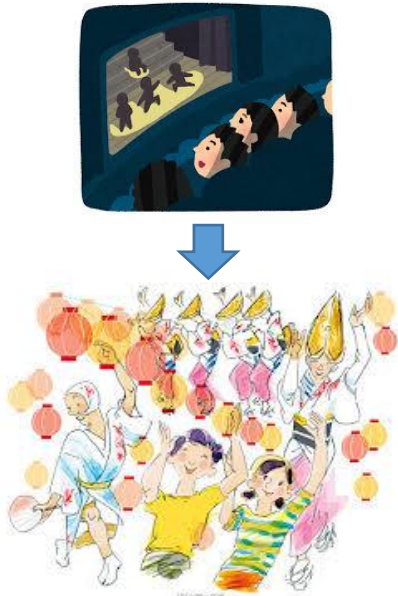
◆ゲームに足を踏み入れる(第三のストレッチ)

傍観したまま、他者を変えようとしかしくないのではなく、活動に飛び込み、自分が変わろうとすることが求められます。

従来型コラボレーションでは、他者の行動を変えようとするのが焦点となります。

しかし、複雑でコントロールされていない状況の場合、自らの行動に、すなわち自分たちの何かが今の事態の一因になっているのか、今の事態を変えるためにやり方を変える必要があるのは何なのかに焦点を置き直す必要があるのです。

足を踏み入れるということは、隔たりと行動の自由が減り、つながりと対立が増えるということです。



ストレッチコラボレーションでは、わたしたちは共創者です。劇の演出家でも観客でもありません。

わたしたちは、他者から自分に注意を向け直すと、自分を解放し自分に力を与えることができるという恩恵があります。

さあ、これで変化を起こす直接的な機会が手に入りました。人をとがめて仕事をさせようと強要したり、おだてたり、待たせたりするのはなく、自分の仕事をせよとこなしにいけばよいのです。

辺見 妙子